慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フィリップ・P・ポイリア著 労働党の出現
Sub Title	Philip P. Poirier; The advent of the labour party
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.1 (1959. 1) ,p.96(96)- 100(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19590101-0096
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590101-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

フィリップ・P・ポイリア著『労働党の出現』

(Philip P. Poirier; The Advent of the Labour Party, 1957)

一

わが国の民主主義が、いまひとつの大きな曲り角にきていることは、毎日の新聞を注意深く読む者ならば、誰しも感ずるところであろう。反動期、然り反動期という言葉のみが、現在のこの昭和三〇年代を象徴しているのではないだろうか。われわれがいまこうして生きているこの時期が、数十年たって二〇世紀も終り近くになった頃に、展望されるときがきたならば、それはわれわれの祖国の歴史と運命にとって決定的な瞬間であったことを想い、悔恨と絶望にかられることが絶対にないと断言できるであろうか。われわれが歴史を学んで得られる教訓は、人類がいかに歴史から学ばなかったかということである。わたくしは、ひとりの社会科学者として、歴史の研究に志す者として、自己の無力ひいては社会科学の研究にたづさわる人々の無力を痛感せざるをえない。頽廃と破滅の途を、われわれの祖国が歩みつつあるとき、このままでゆけば、平和なるべき国土は焦土と化し、人類始まって以来の凄惨な大殺戮にまきこまれることは充分考えられるところである。われわれはこの不幸な事態を絶対にさけられないとはいわない、しかし少なくともこのままでゆけば、遠からずこの危険が不可避的に増大するであろうことを何人も銘記すべきである。なぜなら、わが国の政治は、まさに戦争と破滅の方向へ志向し、われわれの為政者は、民主主義の名のもとに実に民主主義そのものを打倒しつつあるからである。

われわれは、今日の悲劇がどこに由来するか真剣に考えてみる必要がある。いうまでもなくそのもっとも大きな原因の第一は、われわれが被圧迫民族であるという厳然たる事実である。七〇〇にあまる米国の軍事基地によって農民は先祖伝来の農耕地から追放され、漁民はその漁場をうばわれ、そして山村はその炭焼き場を囲いとられている。それだけではない、わが国の悲劇をもっとも深刻にしているものは、大衆の政治意識の低さのなかに求められよう。実際十数年前、戦争の最高責任者として国民を侵略戦争に駆りた当のその人々が、その軍国主義的官僚的なイデオロギーを少しも清算することなく、口を拭って再び国民の前に指導者として立ち現われるというようなことは、およそ他の国々では見られない現象であることは、周知の事実である。外国の軍事的支配のもとにある従属国、かつて明治初年において不平等条約の改正に奔走した政治家のように、清新潑剌たる民族独立の精神を失い、魂を外国に売りわたしたような保守党の政治家たち、これに加えるに国民の政治にたいする無関心、この三者が奇妙にくみ合わされるとき、われわれは、祖国が容易ならぬ危険な方向にむかいつつあることを、痛々と感じないわけにはゆかない。

われわれがこのもっとも危険な道をさけ、他国の運命に祖国を結びつけることを阻止し、平和と民主主義に倚る真に独立の国家を建設する途は、どうしたら見出されるであろうか。さしあたってこの危機を回避するために、あらゆる手段をもって啓蒙活動を行うとしても、この運動の主体となるべきものは一体何か。こう考えてくるとわれわれは、はたとゆきづまらざるをえない。保守反動勢力に対抗して、国民の世論を喚起し、大衆を啓発しようとしても、その主体となるべき真に堅固な、国民的な団体は存在しないではないか。意識のたちおくれた農民をたかめるどのような団体が存在するというのであろうか。保守的な独立自営業者や零細企業者をして政治的にめざめさせるどのような機関が存在しているというのだろうか。

なるほど共産党はその細胞組織を通じて広汎な大衆に訴えてはいるが、その影響は意識の高いきわめて限定された一部の勤労者大衆や知識階級の間だけであり、その背後には、およそ自由民主党の何たるかもわきまえず、また現在の総理大臣の名前も知らないような大衆が、はげしい労働にその日その日を追われているのであって、実はこれらの人々の一票が、総選挙の際には重大な役割を果し、ひいては日本の将来の運命に決定的な影響を及ぼすのである。このように考えてくるとわれわれは、現代の日本の政治において、自由民主党が、いかに露骨な反動的な政党であるかを指摘するだけでは充分ではない。政策的にこれに対抗して、日本の民主化をおしすすめるはずの日本社会党が、いかに無為無策であるか、彼らがその強力な支持者と頼む総評を中心とする組織労働者だけが、労働者なのではない。彼らが、農村や都市の政治的に意識のおくれた階層にたいして、不撓不屈の日常的な啓蒙活動をつづけ、これらの人々をその味方に獲得する努力を払わないならば、社会党は奇蹟でも起らないかぎり、ほとんど政権を掌握することはできないし、それどころか、このまま推移すれば、ワイマール共和国崩壊後のドイツ社会民主党の轍をふまないと誰が断定しえようか。すなわち、日本の国土から外国の軍隊を撤退せしめ、平和にして民主的な真の独立国たらしめる途は、社会民主主義政党としての日本社会党が、何よりも民衆のなかに入り、幾多の障害や困難を克服して根強い下部組織をつくり上げ、いやしくも平和と幸福を願うあらゆる人々を統一的なそして広はんな大衆的な運動に結集せしめることによってのみ、切り拓かれるであろう。そうすることが、諺会に三分の一の議席をしめている社会党の責務であり、もしこのことを怠るならば、かつての社会大衆党が軍国主義的なファシズムに迎合したように、またドイツ社会民主党がナチスの軍門に降ったように、日本社会党は、日に日に反動化しファシスト化してゆく自由民主党の圧力の前に、やがて脆くもついえ去るという危険な事態に直面することとなろう。

だがわが日本社会党は、よくこの困難な課題に耐えられるであろうか。われわれは、歴史の教訓に徴して、これが絶対に不可能であ

るとは考えない。なぜならイギリス労働党の歴史は実にこの困難な闘いの歴史であったからである。もちろんわれわれは、今日のイギリス労働党が、その草創期の戦闘的精神を喪失し、その政策も保守党との間にいちじるしい相違を見出しえないような〝中間的〟なものであることを否定するものではない。しかしそれにもかかわらず、労働党の発展は、保守党の反動化を抑制し、英国の政治が世界の大勢に逆らって、ファシスト化するのをさまたげたのであって、ロシア革命にたいする列国の不当な干渉に抗議し、また一九三〇年代の、かのナチス・ドイツにたいする反ファッショ統一戦線の時期における偉大な役割、そして最近では、スエズ問題における労働党の態度などは、保守党の帝国主義的な政策を阻止する大きな力となったことは、正しく評価されなければならない。

二

「労働党の出現」と題する本書は、その名前の示すとおり、一八九〇年代における社会主義運動と労働組合運動の昂揚にはじまり、一九〇〇年の労働代表委員会の成立をへて、やがて、一九〇六年の総選挙後、イギリス労働党と改称するまでの苦悶にみちみちた二〇年間、この社会主義政党が、その黎明期において遭遇しなければならなかった複雑にして、困難な問題について論じられている。

われわれは最近、草創期のイギリス労働党の研究として、本書のほかにつぎの二つの労作を手にすることができた。すなわち、ヘンリー・ペリングの「労働党の起源」(Henry Pelling; The Origins of the Labour Party, 1880-1900, 1954) とスチュワート・リードの「イギリス労働党の起源」(J. H. Stewart Reid; The Origins of the British Labour Party, 1955) の二著である。前者は、一八八〇年から一九〇〇年にいたる二〇年間、労働党成立までの経緯について、とくに歴史的な記述を中心としてまとめられており、未発表の資料を豊富に駆使している力作である。また後者は、やはり一八八〇年から説きおこし、一九〇〇年労働代表委員会の成立から、それが、一九〇六年労働党と改称した時期をへて、第一次世界大戦にいたるまでをふくみ、とくに労働党の政策的変遷について、詳細な分析が展開されている。これらの二者が、主として十九世紀末期から二〇世紀初頭にかけての労働党の歴史的な発展の叙伝に力点がおかれているのに反し、「労働党の出現」と題する本書は、同じく歴史的な叙述の手法を用いながらも、全体にわたって強烈な問題意識によって貫かれていることは、注目に値する。まことに著者がその序文においてのべているように、「本書を通じて強調されていることは、政治にかんしてであり――社会主義者や労働組合員をして、労働代表委員会に協力せしめたところの戦術、協約および妥協にかんしてであり、労働代表委員会の起源、その自由党との選挙における協力の性質および程度にかんしてである」。すなわち、著者がここでもっとも問題としていることは、労働党の成立とその過程において刻印された性格が、社会主義政党としてのそれであるよりは、自由党の掩護のもとに、そのいちじるしいイデオロギー的な浸透をうけて、社会改良主義的な政党として成長していったという事実であり、著者はこのような前提から出発していることである。

労働者政党としての労働党は、正面の敵、保守党の圧力に対抗するために、何よりも自由党との協調を絶対に必要としたのであり、シドニー・ウェブのいわゆる自由党への「浸透政策」("Permeation")は、自由党員をしてフェビアン主義に改宗せしめんとする異常な努力の結果生れた苦肉の策であったにもかかわらず、逆に、労働党のイデオロギーそのものが、自由党の政策によって浸透されるという矛盾におちいらなければならなかった。これこそ労働党に特異の性格を附与し、世界の社会民主主義政党のなかにおいて、独自の地位をしめさせる所以であろう。

従って著者は、たえず自由党との関係に注目しながら、労働党がその黎明期において遭遇した幾多の問題について、克明に分析している。本書は、つぎのような内容からなる。

序文　一、一九〇〇年以前における労働組合と政治　二、マルクス主義者とフェビアンおよび労働党の理念　三、独立労働党　四、大連合にむかって　五、労働代表委員会の確立　六、南アフリカ戦争にたいする自由党および労働党の反応　七、一九〇〇年――「カーキー」選挙における労働党と自由主義　八、タッフ・ヴェールとクリッサロー　九、独立とウールウィッチ　十、自由党との取引　十一、バーナード・キャッスル　十二、試煉と疑惑の時期　十三、社会主義的戦術の問題――失業保険法　十四、一九〇六年の総選挙　十五、総選挙における労働代表委員会と自由党との選挙同盟　十六、労働党の出現

さきに指摘したように、著者は、労働党の誕生を、つねに自由党との関係――その戦術的協調とイデオロギー的な妥協――という視点から把握しているのであって、このことは、目次をみただけでも明らかである。だがこの基本的な立場とは別に、著者が具体的に本書のなかでとりあげられている問題点は、およそつぎのいくつかに整理することができるであろう。すなわち、㈠労働党のイデオロギーにかんする問題、とくにマルクス主義とフェビアニズムとの確執、㈡帝国主義と社会民主主義との関係、とくに南アフリカ戦争――いわゆるボア戦争――にたいする指導者層の態度、㈢下部組織としての労働組合運動にたいする反動勢力の圧迫、たとえばタッフ・ヴェール事件、㈣一九〇六年の労働党成立時における苦悶などである。この一九〇〇年から一九〇六年迄の時期は、イギリス労働運動史の上でも、もっとも重要なしかも興味ある問題をひそませているにもかかわらず、従来この時期をめぐる研究が閑却されてきたのは、帝国主義段階における労働者階級の運動にたいする接近のしかたにおいて、主としてマルクス主義的な分析方法によるのでなければ、構造的な把握をなしえないためではなかったろうか。従ってまた、労働党成立前後のイギリス社会主義運動を論ずるにあたって、マルク

ス主義の影響を過小評価する傾向が支配的であったためであったと云えないこともない。

しかしともあれ、この書の冒頭において、マルクス主義が果した役割を正しく評価しようとしていることは、本書にひとつの特徴をあたえているものということができよう。そのほか、ほとんど神話的とも考えられるフェビアン協会の労働党建設にたいする貢献が、新たに検討され、むしろI・L・P・(独立労働党)や労働組合の内・部で活躍する社会主義者の役割などが強調されている点は、フェビアン協会にたいする評価とともに、注目に値する。この意味で本書は、客観的な批判と未出版の老大な資料とをもってまとめられた力作であるといえよう。

しかし一方、イギリス資本主義の発展にたいする叙述の不足、とりわけ帝国主義段階における支配階級の政策形成と労働運動にたいする抑圧的な態度――南アフリカ戦争やタッフ・ヴェール事件およびオスボーンの判決にみられる――とこれに反対する労働者階級の運動との関連が、断片的にしか把えられていないため、そのすぐれた問題提起と実証的な分析にもかかわらず、平面的な叙述に終っているのは惜しまれる。―一九五八・一一・九―

(飯田　鼎)

経済学年報 II

経済理論における経験と論理……富田重夫
――マルクシズムの認識を中心として――
労働供給機構の
変位に関する計量的考察……尾崎巌
――賃金率と家計の有業率――
日本中小工業問題の源流とその背景…尾城太郎丸
アメリカ農村工業の成立……中村勝己
一八八〇年代のイギリスにおける
社会主義の復活と労働組合運動……飯田鼎
――イギリス労働党の起源について――

定価　四三〇円
郵税　三二円

発売所　東京高輪局区内三田網町一
慶應通信

経済学関係文献目録

(昭和三十三年十月刊)

経済理論・思想・学説史

*近代経済学教室 5 木村健康、大石泰彦編 B6 三四五頁 三〇〇円 (勁草書房)

*資本主義経済論 伊部政一 B6 二二六頁 三〇〇円 (時潮社)

*ウィリアム・ペティ上〈一橋大学経済研究叢書〉 松川七郎著 A5 二〇六頁 三二〇円 (岩波書店)

統計・数学

*統計読本 森田優三著 B6 二六一頁 二九〇円 (日本評論新社)

経済史・社会史・政治史

*日本外交史研究 大正時代 国際政治 一九五八夏季 日本国際政治学会編 A5 一九八頁 二七〇円 (有斐閣)

*世界中世史研究 1―3 コスミンスキー著 阿部玄治訳 A5 三四一頁 五五〇円 (未来社)

*院政〈日本歴史新書〉 吉村茂樹著 B6 一六六頁 二〇〇円 (至文堂)

*長崎オランダ商館の日記 3 自一六五〇年一〇月至一六五四年一〇月 村上直次郎訳 A5 三三四頁 七〇〇円 (岩波書店)

*明治維新史研究講座 2 歴史学研究会編 A5 二八六頁 四五〇円 (平凡社)

*戦後日本小史 上 矢内原忠雄編 A5 二七二頁 三八〇円 (東京大学出版会)

*近代中国研究 1 近代中国研究委員会編 A5 三七九頁 九〇〇円(東京大学出版会)

*第二次世界戦争前史――一九三九年夏の国際関係――W・ホーファー著 林健太郎、斎藤孝訳 A5 二五一頁 三〇〇円(御茶の水書房)

*ローマ帝国衰亡史 9 〈岩波文庫〉 ギボン著 村山勇三訳 B6 三八五頁 一六〇円 (岩波書店)

*封建社会成立史論 服部謙太郎著 A5 一五九頁 四〇〇円 (日本評論新社)

*日本の貨幣〈日本歴史新書〉 小葉田淳著 B6 二四六頁 二五〇円 (至文堂)

*日本全史 1 原始 斎藤忠著 A5 三三八頁 四五〇円 (東京大学出版会)

*民権運動の展開 明治史研究叢書 第二期 3 明治史料研究連絡会編 B6 二四〇頁 二五〇円 (御茶の水書房)

*ソヴェトの内幕 1 〈現代史双書〉 ジョン・ガンサー著 湯浅義正訳 A5 二二九頁 三〇〇円 (みすず書房)

*鴻池善右衛門〈人物叢書〉 宮本又次著 B40 二七七頁 二一〇円 (吉川弘文堂)

*日本の兵士と農民〈岩波現代叢書〉 E・H・ノーマン著 大窪愿二訳 B6 一五七頁 一六〇円 (岩波書店)

商工業・経営・会計

*近代経営と組織 高宮晋監修 A5 三七〇頁 五八〇円 (日本生産性本部)

*近代経営と経営者 藤芳誠一著 A6 二五七頁 二八〇円 (経林書房)

*生産管理〈経営管理全書〉 大須賀政夫著 A5 二八一頁 三六〇円 (日本経済新聞社)

*財務諸表論 1 改訂新版〈経理経営書新書〉 評論社編集部編 B40 二五四頁 一〇〇円 (評論社)

*現代企業における資本・経営・技術〈経営学叢書〉 上林貞次郎著 A5 三一二